

〔教育実践研究〕

保健師の実践上の課題と連動させて 実習を行なうことの教育効果におよぼす意味

坪内 美奈¹⁾ 松下 光子¹⁾ 森 仁実¹⁾
大井 靖子¹⁾ 宮島 ひとみ¹⁾ 山田 洋子¹⁾
大川 眞智子²⁾ 岩村 龍子²⁾ 北山 三津子¹⁾

The Meaning of Students Practice Programs Connected with Nursing Activities Have Influenced Educational Effectiveness

Mina Tsubouchi¹⁾, Mitsuko matsushita¹⁾, Hitomi Mori¹⁾,
Yasuko Ohi¹⁾, Hitomi Miyajima¹⁾, Yoko Yamada¹⁾,
Machiko Ohkawa²⁾, Ryuko Iwamura²⁾, and Mitsuko Kitayama¹⁾

1. はじめに

地域基礎看護学実習の一部である公衆衛生看護領域の実習は、保健所および市町の保健センターが実習施設であるが、保健師の業務も拡大する中で、看護系大学の増加に伴い学生数が急増し、実習場の確保が困難な状況にあるという全国的な傾向¹⁾と違わず、筆者らも、実習施設の確保には例年頭を悩ましている。看護学実習は、教員のみならず実習を行なう施設や施設スタッフの協力・支援・指導によって学習環境が整って成り立つ²⁾ので、実習指導における大学教員と実習施設の看護職との協働体制づくりは重要と考えている。

本学では、平成17～19年度に、岐阜県内実習施設の看護職（臨地実習指導者）を対象に、臨地実習指導者の実習指導にかかわる教育能力の向上を図ることを目指した個別面接研修やワークショップが実施され、市町村・保健所においても、実習や学外演習を受け入れたことのある28市町7保健所の実習担当保健師と直属の上司である保健師や管理者を対象に実施された。その結果、実習指導者の大学教育に対する理解が深まったり、教育効果を高める実習のあり方・方法が検討できた³⁾。また、平成18年度からは県の現任保健師研修として実習指導

者研修会が、本学を含めて県内の看護の4年制大学教育課程をもつ大学3校の協力により、開始されるようになった。

このような大学の取り組みと並行し、筆者らは、学生実習が実習施設の保健師にとっても、活動の充実や改善に有効に活かすことができるように、また学生にとっても教育効果が高まるようにと意図して、3年次看護学領域別実習や4年次卒業研究において、実習方法を模索してきている。保健師が気にかけている実践上の課題をとりあげて、よりその課題が明確になるように、また、保健師の活動のあり方を検討できるように学生実習を行なう理由は、保健師の活動が充実することで、より良い実践から地域における看護の本質を学生が学べるのではないか、また、活動の充実を追究する保健師の姿を学生が知ることで、専門職としてのあり方を学べるのではないかなどの教育効果があるからである。看護実践、教育、研究の機能を1つの活動に組み込むというユニフィケーションの考えがあり⁴⁾、ユニフィケーションが取れない場合でも、質の高い実習場になるように教員が働きかけていくことは必要と言われている⁵⁾。筆者らの取り組みは、実習施設の看護の質を高めていく取り組み

1) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学講座 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing
2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Collaboration Center, Gifu College of Nursing

という教育的な意味もあると考えている。

その一つの試みとして、3年次領域別実習において単独家庭訪問の実習施設であるA町で、保健師の実践上の課題に対し活動が充実・推進されることを目指して保健師と教員により共同研究を実施し、また単独家庭訪問実習においても、保健師の活動の充実に寄与し、かつ学生の教育効果も高めるように、保健師と相談しながら実習内容を企画し、実施した。

学生単独で行なう家庭訪問実習プログラムについては、看護援助の特質を深く学べる意義があるなど、学士課程における地域看護実習として有効であることが検証され^{6)~8)}、さらに教育効果が高まるよう工夫がされている^{9)~11)}。本報告では、実践上の課題に対して保健師の活動の充実や改善を図るプロセスに学生実習も連動するよう単独家庭訪問実習を工夫したことが、実習環境や学生の学びにどのように影響したのかを明らかにし、教育効果に及ぼす意味を考察したい。

<用語の説明>

学生の学び：実習の体験および、学生、実習指導者、教員とのカンファレンスやグループディスカッションの体験を通して、学生が修得した看護の意義、必要となる知識や技術、態度。

実習環境：実習環境には、臨地実習施設における施設スタッフの看護学実習への協力・支援・指導などの環境と、施設や学習教具などの整備など物理的な環境がある¹²⁾が、本研究では前者に焦点をあてる。

共同研究事業：本学教員と岐阜県内の看護職との日常の看護業務の改善・充実に直結した研究活動。応募様式(研究計画)の申請後、本学の共同研究として適切であるかの審査結果に基づいて予算配分がされ、当該年度の取り組みが開始される。

II. 単独家庭訪問実習について

1. 単独家庭訪問実習の位置付けと実習内容

単独家庭訪問実習は公衆衛生看護実習の一部であり、公衆衛生看護実習の目的・目標を表1に、単独家庭訪問実習の位置付けと実習内容を表2に示した。単独家庭訪問実習では、担当保健師及び教員の指導の下に、原則、学生1人につき成人・高齢者1事例、母子1事例計2事例の家庭訪問を、学生が単独で行なうことを通

して学習する。なお、1グループの学生人数は11~15名である。

家庭訪問後には事例カンファレンスを学生、教員、担当保健師と共に実施し、単独家庭訪問実習の最終日のカンファレンスでは、情報収集の視点にそって、訪問事例の一覧表を学生が作成し、地区の健康問題について学生主体でディスカッションをしている。これは実習目標(表1)の10.地区活動の手段としての家庭訪問の意義を理解するに位置づき、カンファレンス前に教員から学生に実習目標との関連でカンファレンスの目的・方法を説明している。最終カンファレンスで、保健師は、報告内容や意見交換された内容に対してコメントを述べる。また、3日間を振り返っての学びと今後の課題について学生一人ひとりが報告したことについても、助言をする。

2. 保健師の実践上の課題と連動させた単独家庭訪問実習にするための工夫

A町における実践上の課題は、前年に保健師が実施したa地区における全戸訪問の結果と、a地区の地域ケア会議の場での全戸訪問結果に対する地区役員の意見から、a地区ではストレスをもっている人が多いので、ストレス発散になるような世代を超えたつながりのある健康づくりの場をつくるということであった。

そこで、A町保健師3名と教員7名により、異世代交流を促進する活動を地域住民と協働しながら企画、実施、評価し、その活動方法を蓄積することを目的として、本学の共同研究事業に申請し共同研究を開始した。そして、単独家庭訪問実習においても、地区診断に活用できるように、また、異世代交流のニーズや活動方法について検討できるように、実習対象者の選定やカンファレンスでのディスカッション内容を保健師と相談し企画した。

表1 公衆衛生看護実習の目的・目標(大項目)

1. 保健医療福祉に関わる行政機関の機能・役割を理解する
2. 保健所の機能・役割を理解する
3. 地区活動の展開方法を理解する
4. 地域特性に合わせた保健福祉事業の展開方法について理解する
5. 信頼関係形成の意義と方法を理解する
6. 援助のプロセスを試行して、理解する
7. 対象の主体的な問題解決を促す援助方法を理解する
8. 家族を単位として援助する意義と方法を理解する
9. 家庭に向いて援助を行う意義を理解する
10. 地区活動の手段としての家庭訪問の意義を理解する
11. 他機関・他職種との連携・協働について理解する
12. 住民との協働について理解する
13. サービス資源の活用を促す援助の必要性と方法を理解する
14. 地域ケア体制の中での保健師の役割について理解する
15. 住民のニーズを行政施策に反映させていくことの重要性を学ぶ

A町で実践上の課題と連動させて実習をする取組みは3年間継続している。

Ⅲ. 方法

1. 実習環境の変化の分析

1) 情報収集方法

実践上の課題と連動させて単独家庭訪問実習を実施するにあたって、教員がA町保健師と実習前後の相談・調整や実習中に関わりをもつ度に、日にち、手段、関わった保健師は誰か（各保健師に割り当てた記号で示す）、協働して実施したこと、教員の意図と実施内容、保健師が実施した内容を記録する。また、実習指導に関わった保健師等の人数や時間については、単独家庭訪問実習のプログラム表からも確認する。

2) 分析対象

A町の保健師など施設スタッフの単独家庭訪問実習への協力・支援・指導に関する記録と実習プログラム表。

3) 分析方法

学びの分析対象となった学生の実習クールからその翌年にかけて実習環境がどのように変化したかをみるために、何名の保健師がどのように実習に協力・支援・指導

したかを、時期毎に項目別に整理し、記述する。

2. 学生の学びの分析

1) 対象

A町で実習を行なった3年生42名（3グループ分）の内、承諾の得られた39名の下記に示すレポートである。学生は学習課題として、「家庭訪問の実習を終えての学び・課題」について実習レポートを書く。3段階の学びを記述するようになっており、1段階目は、単独家庭訪問実習後に、①この家庭訪問実習で学んだこと、②課題として感じたことを記述する。2段階目は、市町村での同行家庭訪問の実習後に、上記の①②を記述する。そして、3段階目として学内でのまとめを終えた後に、家庭に出向いて行なう看護についての学びを記述する。

この中の1段階目の家庭訪問実習で学んだこと・課題として感じたことと、3段階目の学内でのまとめを終えた後の実習レポートの記述内容を分析対象とする。

2) 分析方法

分析対象である実習レポートの記述内容について、1つの意味のある文章のまとまりを1件として記述する（基本的には1文章が1件である）。学生の学びの定義に照らして学びが記述されている文章を抽出し、内容の

表2 公衆衛生看護実習における単独家庭訪問実習の位置付けと実習内容

学内オリエンテーション（2日間）
①公衆衛生看護実習の目的・目標の理解
②地区活動事例を用いたグループワーク
③地区活動についての個別レポート作成
④単独家庭訪問準備
・家庭訪問の目的の振り返り
・模擬事例を用いて、訪問計画立案・グループワークと発表
・各自の訪問対象者について訪問計画立案。教員の個別指導
・自己学習
⑤保健所実習オリエンテーション
⑥市町村実習オリエンテーション
単独家庭訪問実習（3日間）
①地区概況・地区活動計画についての説明
②家庭訪問
③記録
④家庭訪問後のカンファレンス（事例カンファレンス、全事例について情報収集の視点にそって一覧表を作成し、地区の健康課題についてのディスカッション）
市町村実習（4日間）
①地区概況・地区活動計画についての説明
②地区把握
③保健福祉事業への参加
④同行訪問
保健所実習（1日間）
①保健所の施設説明
②保健所の保健師活動事例についての説明と、役割機能についての検討
公衆衛生看護のまとめ（2日間）
①市町村実習・保健所実習の報告と共有
②地域を基盤とした看護活動についてのグループディスカッション（保健師らしいと感じた活動、家庭に出向いて行う看護の方法、行政に所属して機能する看護の役割・機能）
③地区活動のイメージ図の紹介と意見交換
④個別面接

類似性により分類し、カテゴリ一名をつけた。分析対象外としたのは、学生の興味・関心を記載した文章など数件であった。分析は第一著者が行ない、分析結果について共著者から助言を得た。

3. 倫理的配慮

A町で単独訪問実習を行なう3年次学生には、学内オリエンテーション時に、研究の目的、保健師と大学が協働して地域の健康課題を解決する取り組みに実習を組み込んで実施すること、レポート類を本研究に活用するが最終レポートの使用にあたっては成績評価がでた後に同意を求める予定であること、したがってこの研究協力の有無が成績評価に関係しないことについて、文書を用いて説明し書面で承諾を得た。そして、成績評価を終えた次semester当初に、研究の目的と最終レポートの研究への活用、活用の際には個人が特定されないことを文書を用いて説明し、書面で承諾を得た。また、保健師および所属長には、研究の目的・趣旨、個人が特定されないこと、情報の目的外使用をしないこと、研究への参加中断が不利益をもたらさないことを文書を用いて説明し、書面で承諾を得た。本研究は、岐阜県立看護大学の研究倫理審査部会の承認を得た。

IV. 結果

1. 実習環境の変化

実習環境の変化を表3に示した。

1) 実習の企画・調整

従来は、学生が訪問する対象の選定への協力や実習指導に携わる保健師の配置を依頼し、最終カンファレンスの内容を話し合っていた。実践上の課題と連動させて実習を行なうにあたり、実習前年の1月に1回、4名の保健師（管理職、実習指導担当者）と実習を行なう方向性や学生の訪問対象者について話し合った。

1クール目の実習前には、3月に2回、2名の保健師（実習指導担当者、異世代交流の事業担当兼管理的立場の者）と単独家庭訪問実習を地区診断にも活用していく上で、保健師が捉えている地区の状況を確認し、地区把握項目についてその理由を確認しながら精選した。1クール目の実習直後に、先の2名の保健師と2クール目の実習の対象について相談し、その後2回、その2名と1回目の実習評価を行ないつつ、学生に捉えてきてほし

い項目をさらに精選する必要について話し合った。また、異世代交流の活動を推進していく上で、学生のカンファレンス資料も活用して検討できるとよいことを話し合い、学生に特に捉えてきてほしい項目を検討し、確認した。

2クール目の実習中以降は、保健師の説明が学生に伝わるように保健師が捉えてきてほしい項目を教員が再度確認したり、学生が質問できるように保健師と学生間のコミュニケーションが図られるようにした。また、2クール目の実習後には、異世代交流活動を推進していく上で地区役員と保健師が話し合いをする時の参考にといい、学生のカンファレンス資料から、異世代交流を通じた健康づくり活動の方法の考察などの項目をまとめなおして保健師に提供した。

3クール目の前には、2回、実習指導担当者とメールや直接に会って学生の訪問対象や異世代交流促進の活動に実習をどう位置づけられるか相談し、学生の訪問対象や学生が捉えてくる内容について打ち合わせた。3クール目の実習終了後から翌年の実習開始までには、実習指導担当保健師や管理的立場の保健師に、3回、メールや直接に会って、実習を実践上の課題に連動させて実施する方向性や学生が訪問する対象について打ち合わせた。

2) 学生が訪問する対象の選定

2クール目では異世代交流の場に来所してほしいa地区の虚弱高齢者を対象にし、3クール目では交流のもう一方の側である子どものいる若い世代を対象にして、高齢者との交流経験の現状を把握し交流の可能性を探ろうとした。翌年からは訪問対象者数は原則として学生1人につき2名となった。

3) 学生が立案した訪問計画への指導

保健師も対象への支援経過があるため、1クール目は学生15名（訪問事例数2）に対し保健師3名が、2クール目は学生11名（訪問事例数1）に対し保健師1名が、3クール目は学生14名（訪問事例数1）に対し保健師2名が90分～120分程度かけて指導をした。指導をする保健師に過重な負担がかからないようにと管理職保健師が配慮し、翌年は2～3名の保健師が指導を行なうようになった。

4) 保健師によるオリエンテーション内容

1クール目では、対象の選定理由、対象の特徴と特に捉えてきてほしいことの説明であったが、2クール目

降、実践と関連させて、なぜその対象を訪問するのかという理由についても説明がされた。翌年には、「この地区はアパートやマンション暮らしの転入者が多く、同居が少ない。乳幼児相談の利用も高く、様々なことで悩んでいるようだ。母親が慣れない環境で育児をしている様子が伺えるのでよく捉えてきてほしい」と保健師の課題意識がより一層説明されるようになった。

5) 最終カンファレンス

最終カンファレンスには実習の企画・調整をした保健師が出席し、学生同士が意見交換した地域のニーズや今後の活動のあり方について、例えば3クール目では、「育児面では昔と今の常識が違うこともあり、高齢者の言う

ことを受け入れがたいという固定観念をもっている若い世代もいるが、農作業の面では、高齢者の知識がとても役立ったという意見もあり、こうした所から、高齢者の理解へつなげればよいと思う」などのように保健師が捉えている地域の状況を説明したり、学生が捉えたことが地区活動の発展にどのように役立つかなど前向きなコメントを返していた。翌年は、実習指導担当者だけでなく参加可能な保健師や栄養士が出席するようになった。

上記のように、実習指導担当者だけでなく事業推進者兼管理的立場の保健師と、活動をどのように推進していくか、その上で実習をどうするか実習の企画・調整を綿密に行なう関係ができ、そして、訪問対象者の確保への

表3 実習環境の変化

項目	1クール目	2クール目	3クール目	翌年
教員との実習の企画・調整に関わった保健師数と回数	2名, 2回 (全体の企画について4名と1回)	2名(実習指導担当者+事業推進者兼管理的立場の者)3回	左記に同じ, 2回	2名(実習指導担当者+管理的立場の者), 3回(1クール前迄)
訪問対象者数(学生1人あたり)	2名	1名	1名	2名(4月のみ1名)
学生が訪問する対象の選定理由として保健師と合意したこと、対象の概要	出生数の多いb地区の地区診断に活用できるようにする。 母子事例:主に出生数の多いb地区の乳児健診等の利用者 高齢者事例:a地区の介護予防事業終了者	異世代交流の場に来所してほしいa地区の虚弱高齢者を対象にして、a地区高齢者の生活の特徴を把握し地区での異世代交流や健康づくりの可能性を探る。 高齢者事例:a地区老人クラブ会参加者の内、基本チェックリストで介護予防判定ありの者	子どものいる若い世代の子育ての現状と高齢者との交流経験の現状を把握し交流の可能性を探る。 母子事例:全町の乳幼児健診・相談の利用者	共同研究(家庭訪問を通して個人、家族、地域をみる視点を追究する)の方向性と関連させ、保健師が気になる地区や介護予防が必要な対象を訪問し、生活の実態を把握する。 母子事例と高齢者事例
学生が立案した訪問計画に指導した保健師数	3名	1名	2名	2~3名
保健師によるオリエンテーション内容	対象の選定理由、対象の特徴と特に捉えてきてほしいことの説明	左記に加えて、実践と関連させて対象選定や特に捉えてきてほしいこと理由	左記に同じ	左記に加えて、保健師の問題意識
最終カンファレンスへ出席した保健師数	3名	2名	2名	出席可能な保健師と栄養士(約5名)
最終カンファレンスの地区の健康課題についてのディスカッション内容	地区の特徴として気づいたこと、育児支援上の課題、高齢者の訪問もふまえて異世代の交流の実態	a地区踏査の結果報告、a地区の高齢者の生活、健康意識の特徴、異世代交流型の健康づくりの催しの内容や方法	町または地区の特徴、特徴から考えたニーズ、異世代の交流の内容	訪問対象者の特徴、対象の生活に影響する地域の特性、共通するニーズ、ニーズから考えた援助について
最終カンファレンスでの保健師からの助言、コメント例	育児だけでも大変だが、外に出て行きたい、交流したい気持ちも持っている人多いと多いと思った。乳児健診の場面でも交流できるように会場の設営を工夫している。地区役員からも年代の違う人と交流したいという希望もあるので形にしていきたい。	日昼独居者の昼食がおろそかなので、料理教室をという提案があったが、それをどう家での生活につなげていくか、普段の食事の状況の把握が大切。コミュニティバスがないという意見のように、異世代交流の催しをするにも家の近くでないとなかなか。住民の来やすい場所で行う必要性。	育児面では昔と今の常識が違うこともあり、高齢者の言うことを受け入れがたいという固定観念をもっている若い世代もいるが、農作業の面では、高齢者の知識がとても役立ったという意見もあり、こうした所から、高齢者の理解へつなげればよいと思う。積極的に交流は求めていなくても、何か困ったことがあった時にお互い見守られるような環境を作っていくことが必要ではないか(全ての世代に共通)。	一見問題がないようでも、家に入っていくといろいろ見えてくることもある。困っていること、今後問題になってきそうなことに対応できるとよい。その場限りになりがちだが、継続していくことが大切。

協力が一層得られるなど実習で体験させたい内容を確実にこなせる実習環境になった。また、学生が家庭訪問をする対象について、訪問の必要性や理由がわかりやすいオリエンテーション内容になり、カンファレンスでも学生が家庭訪問をしたことがどのように保健師の地区活動に役立つのか、地区活動の手段としての家庭訪問の意義がわかる助言がされるなど、家庭訪問の体験の前後における指導が充実するという実習環境の変化をもたらした。

2. 学生の学び

学生の学びを表4に示した。承諾は42名中39名から得られた。大カテゴリを『 』で、中カテゴリを「 」で、小カテゴリを〈 〉で示す。39名の学生全員から合計256件の学びが確認でき、4つの大カテゴリ、19の中カテゴリに分類できた。

1つめの大カテゴリは『対象者本人・家族に対して援助をすることについての学び』であった。中カテゴリの「家庭に出向いて援助を行なう意義」は、71件(実人数では33名)の学びがあり、全ての中カテゴリで最も多い学びであった。その下位のカテゴリとして、〈信頼関係ができる要素である〉〈五感をつかって情報収集できる〉〈対象理解が深まる〉〈普段と変わらない対象者・生活を把握する〉〈対象の生活に即した援助につながる〉〈家族への援助・家族を巻き込んだ援助を行なう〉の学びが含まれた。その他の中カテゴリは、「対象と信頼関係を築く必要性の理解」「信頼関係形成の方法の理解」「情報収集の方法の理解」「対象理解の方法の理解」「援助ニーズを判断する方法の理解」「個別のニーズを捉えた援助」「対象の主体性を尊重する援助の大切さ」などであった。

2つめの大カテゴリは『対象者本人・家族のニーズを基軸にサービス資源につなげる学び』であった。中カテゴリには、「家庭訪問から次の援助やサービス資源につなげ、継続して支援する」等が含まれた。

3つめの大カテゴリは、『個別援助と地域の特性・ニーズの明確化とを関連させた学び』であった。中カテゴリには、「家庭に出向き五感で対象者の生活環境や地域を把握する」「個別のニーズと地域のニーズを関連させて考える」「地域の顕在・潜在している健康問題に対応する保健師の責任性についての学び」が含まれた。

4つめの大カテゴリは、『自らの専門性を高める学び』

であり、中カテゴリは「看護職として自分自身の幅広い勉強の必要性」であった。

V. 考察

今回の取組みから、実習環境としては、実習指導担当者だけでなく事業推進者兼管理的立場の保健師と実習の企画・調整を綿密に行なう関係ができ、実習で体験させたい内容が確実にこなせるようになり、家庭訪問の体験の前後における指導が充実したことがわかった。

学生が単独で行なう家庭訪問実習に対する臨地指導者の評価より、教育効果を高めるには、学生に対する事前の動機付けや事後の受け止めが大事であること、また臨地側指導者と教員が、学生に対する教育のあり方を共に考える機会をもつことが大事だと言われている¹³⁾。実践上の課題と連動させた実習では、活動をどのように推進していくか、その上で実習をどうするかを保健師と組織的に、繰り返し話し合うことができたため、それが実習指導にも活かされ、教育効果をもたらしたのではないかと考える。

学生の学びをみると、本学と同様に、学生単独で行なう家庭訪問実習プログラムを実施した学生の学びの分析では、基本的な看護技術や対象者と援助者との一対一の関係を基盤とした看護の本質に関わる学びが報告されており^{14)~16)}、本報告においても、対象者本人・家族に対して援助をすることについての学びや対象者本人・家族のニーズを基軸にサービス資源につなげる学びのように、看護の基本についての学びが多く見られた。

この背景としては、学生が立案した訪問計画の確認において、対象者の個性を重視した訪問計画になるように、また、訪問対象の選定理由をふまえて、保健師として気にかかっている地域的な背景や対象者と地域のつながりなども含めて、学生一人ひとりにきめ細やかな指導がされるようになったことも学びに影響を与えていると捉えている。

地区活動の手段としての家庭訪問の意味の理解については、1回の学生の単独訪問だけでは理解が難しいと報告されている^{17,18)}が、本報告では、看護の基本の学びとも重なるが、上記に該当する対象者本人・家族のニーズを基軸にサービス資源につなげる学び、加えて、個別援助と地域の特性・ニーズの明確化とを関連させた学び

があった。単独家庭訪問実習後から学内まとめ後までに、市町村実習で保健師に同行する家庭訪問等の体験、学内まとめでの学生同士のディスカッションや教員からのコ

メントをふまえて、学生は学びを深化させていくのだが、家庭に向き五感で対象者の生活環境や地域を把握できる学びは、単独家庭訪問実習後に8件、学内まとめ後

表4. 学生の学び

N = 39

カテゴリ	単独後,まとめ後: 合計件数(実人数)	記載例
I. 対象者本人・家族に対して援助をすることについての学び		
1. 家庭に向向いて援助を行う意義	30, 41: 71 (33)	
1) 信頼関係ができる要素である	0, 5: 5 (5)	こちらから向向いていくことが出来るため、関わり作りの積極的なきっかけとなる
2) 五感をつかって情報収集できる	4, 2: 6 (5)	実際に本人の顔を見て話をすることで、言葉だけでなく、その人の表情や態度からも情報を得ることが出来るということも学んだ
3) 対象理解が深まる	7, 5: 12 (9)	生活の場に入って看護を展開していくので、普段の生活やどんな環境の中で暮らしているのかを知ることができ、生活そのものを知ることができると大きな意義があるとわかった
4) 普段と変わらない対象者・生活を把握する	10, 11: 21 (19)	家庭に向向くことは、家庭でのその人の様子や生活を知ることができると、リラックスして話が出来るという利点がある
5) 対象の生活に即した援助につなげる	7, 15: 22 (20)	どのような生活を送っているかわかるため、アドバイスもより生活に即したものが出来る
6) 家族への援助・家族を巻き込んだ援助を行う	2, 3: 5 (5)	家庭へ向向くと家族に出会う機会も増え、家族の状態も把握しやすく、本人とともに家族も巻き込んで援助をしていける
2. 対象と信頼関係を築く必要性の理解	8, 9: 17 (12)	家庭に向向くということは対象者のプライベートな場に入るということであるので、対象者に受け入れてもらうこと、信頼してもらうことが大切になる
3. 信頼関係形成の方法の理解	5, 15: 20 (14)	「いつでも困ったことがあれば、相談してね」と声かけを行い、存在を伝え、安心してもらえるようにすることが大事である
4. 情報収集の方法の理解	10, 4: 14 (12)	把握のための情報収集に集中するのではなく、相手の価値観、意思を尊重し、保健師側で流れをつくるというよりは、相手のペースにあわせて傾聴する姿勢が大切
5. 対象理解の方法の理解	5, 1: 6 (6)	観察した相手の様子、表情、家の中の様子など、様々な情報を収集し、総合的に対象理解に努めなければいけない
6. 援助ニーズを判断する方法の理解	4, 1: 5 (5)	対象の将来像を考えた上で、ニーズを見つけていることを学んだ
7. 個別のニーズを捉えた援助	4, 2: 6 (6)	個別のニーズを捉えることができ、個別的な対応・援助ができる
8. 対象の主体性を尊重する援助の大切さ	2, 5: 7 (7)	住民が生活をしていく中で、健康やより良い状態に向かっていくために生活を捉えて、住民自身が考え、それをサポートしていく姿勢が大切であるとわかった
9. 話をきくという援助の方法	1, 1: 2 (2)	生活について話すことが、対象者にとっては自分の生活を振り返るきっかけとなるのが大切だと思った
10. 倫理に適った援助の実践	0, 4: 4 (4)	家庭に向向くという事は対象のプライバシーに介入することになる。その事に最大限配慮して必要十分な情報収集と効果的な活用により、人権の侵害が起これないようにすることが必要
11. 家庭訪問における事前準備	4, 0: 4 (4)	これだけは聞かなければいけないというところを確認する事前の準備が必要だとわかった
12. 家族を捉えて援助する方法	11, 15: 26 (21)	家族として生活しているので、食事のことなど家族共通の要因を掴み援助ニーズを把握することが重要である
13. 大きな問題にさせない予防的な援助	2, 2: 4 (4)	問題がないように見える対象であっても、詳しく見ていくと、何かしら今後問題となるような事や気をかけていかなくてはならないようなことが出てくると知った
II. 対象者本人・家族のニーズを基軸にサービス資源につなげる学び		
1. 家庭訪問から次の援助やサービス資源につなげ、継続して支援する	3, 12: 15 (14)	家庭訪問は1回の支援で終わりではなく、乳児相談や健診につなげて継続して支援していくことが大切である
2. 個別のニーズに対応するために関係者やサービス資源につなげる	2, 2: 4 (4)	対象となる世帯の社会資源活用状況を把握して、必要だと思われる資源を紹介し、活用を促す機会にすることが出来る
III. 個別援助と地域の特性・ニーズの明確化とを関連させた学び		
1. 家庭に向向き五感で対象者の生活環境や地域を把握できる	8, 10: 18 (16)	住居環境や近所づきあいの状況など、家庭に向向かなければ得られない情報を収集できる上に、生活のリズムも知ることが出来るので、対象者の生活スタイルに合った援助を提供できることを学んだ
2. 個別のニーズと地域のニーズを関連させて考える	11, 9: 20 (20)	私の担当した事例だけではわからない事が、何例も見ると明らかにするという事を理解した
3. 地域の顕在・潜在している健康問題に対応する保健師の責任性についての学び	0, 4: 4 (4)	自分から相談できない方や、向向いて来られない方のニーズを捉えていくためにも、保健師が自ら積極的に向向いていくことが大切だということも学んだ
IV. 自らの専門性を高める学び		
1. 看護職として自分自身の幅広い勉強の必要性	2, 0: 2 (2)	ニーズや悩み相談に応じられるよう幅広い専門知識が必要だということも痛感した
V. その他		
	3, 4: 7 (7)	行政に所属しているため、地域の特性を理解し、その地域にあった保健事業が提供できるよう、調査や研究をして改善し続けていることを学んだ

10件、個別のニーズと地域のニーズを関連させて考える学びは、同様に11件、9件あった。

保健師によるオリエンテーションは、どの実習施設であっても、地区概況・地区活動計画、訪問対象者について、特に捉えてきてほしいことについて説明がされている。実習を実践上の課題と連動させて行なうことにより、A町ではこれらに加えて、実践と関連させて対象選定の理由や特に捉えてきてほしいことが説明された。このことに対しての直接的な学びは確認できなかったが、個別援助と地域の特性・ニーズの明確化とを関連させた学びが単独家庭訪問実習後からあった背景として、家庭訪問が地区活動の一つの手段であることを保健師の言葉や姿勢からも学んでいるのではないかと考えた。

また、最終カンファレンスも、学生個々が捉えた家庭訪問の情報を地区活動にどう活用するか、つまり、個々の事例の情報を集約して地域の特徴や共通するニーズを見出すこと、そのニーズを基に援助のあり方を検討する思考のプロセスを学生自身が体験することになり、それも単独家庭訪問直後から、個別援助と地域の特性・ニーズの明確化とを関連させた学びにつながったのではないかと考える。この最終カンファレンスもどの実習施設でも実施しているが、A町では実習指導担当者だけでなく実習の企画・調整に携わった複数の保健師が参加し、学生の報告を聞き、保健師が捉えている地区の状況を伝えたり、保健師が推進している活動との関連で、学生が捉えた情報がどのように今後の活動に役立つかを伝えてくれたことも、学生の学びにつながったと考える。これらから、保健師の活動の充実を図るプロセスに学生実習を連動させることは、実習目標の到達に向けて学生が学びを深められるような実習の協力・支援・指導が実習施設の保健師から得られる教育効果をもたらすのではないかと考える。

しかし、個別援助と地域の特性・ニーズの明確化とを関連させた学びは、対象者本人・家族に対して援助することについての学びに比して少ない。学生は、実習協力の承諾が得られた対象に家庭訪問をさせていただくのであるが、なぜ、この対象に家庭訪問をするのか、実践上の課題や保健師の活動との関連において理解できるように今後も工夫していく必要がある。また、家庭訪問の計画立案、実施、評価、記録の体験だけでなく、最終カン

ファレンスにおけるディスカッションの学びを学生が意識化できるようにすること、そもそも、このカンファレンスの準備として情報収集の視点にそって訪問事例の一覧表を作成する意味、つまり、個別のニーズを集約して地域のニーズを見出すプロセスについて、学生が理解できるようにしていくことも今後の課題である。

最後に、「行政に所属しているので、地域の特性を理解し、その地域にあった保健事業が提供できるよう、調査や研究をして改善し続けていることを学んだ」という学びがわずかながらあった。保健師自身も説明をするにあたって、活動推進の経緯を把握し、保健師としてどのような目的で何を学生実習に期待しているのかを、自分なりに整理しておく必要がある。活動を充実させていこうとする保健師の姿勢が、説明を通して学生に伝わったのではないかと、実践上の課題と連動させて実習を行なうことは、こうした保健師の姿勢を側面的に支えることにもなると捉えている。

VI. おわりに

本研究では、A町の保健師の実践上の課題に対し、活動の充実に寄与するように単独家庭訪問実習を実施したことによる実習環境の変化と学生の学びを分析した。

全ての施設でA町と同じように単独家庭訪問実習を実施できているわけではなく、実習方法については今後も検討を要するが、今回の取り組みにより、学生実習を保健師の活動の充実や改善の機会となるようにすることが、教育効果において意味があることを確認できた。今後も、教員としてこうした取り組みを継続し実習プログラムの工夫をしていきながら、その教育効果をさらに検証して、実習プログラムのあり方を検討していきたい。

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)18592436(研究代表者：坪内美奈)の一部である。

文献

- 1) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会(第2回)議事録, 2009-04-20, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/gijiroku/1268780.
- 2) 永見瑠美子：第2部臨地実習指導者の育成, 看護教員と臨

- 地実習指導者（藤岡完治，谷宜譜美子編），1版；87，医学書院，2006.
- 3) 平成20年度看護実践研究指導事業報告書 岐阜県における看護活動の充実に向けて：岐阜県内実習施設の看護職（臨地実習指導者）との共同体整備に向けて（平成17～19年度）；110-113，岐阜県立看護大学，2009.
 - 4) 小松美穂子：看護教育と看護サービスの統合，インターナショナル・ナーシング・レビュー，19(2)；8-9，1996.
 - 5) 新道幸恵：教員が地域貢献できるシステムづくり，看護教育，47(5)，378-383，2006.
 - 6) 宮崎美砂子：千葉大学看護学部における家庭訪問実習学生単独で行う家庭訪問実習プログラムの意義，Quality Nursing，8(2)；167-174，2002.
 - 7) 山田洋子，井出成美，宮崎美砂子，他：実習を通して行う地区活動に関する学生の理論検証，日本公衆衛生看護教育研究会誌，8(1)；20-25，1998.
 - 8) 俵 麻紀，北山三津子，御子柴裕子，他：家庭訪問実習の教育効果，長野県看護大学紀要，2；17-27，2000.
 - 9) 前掲7).
 - 10) 武藤紀子，浦奈穂美，牛尾裕子，他：家庭訪問実習における地域看護教育方法の検討，千葉大学看護学部紀要，第24号；63-71，2002.
 - 11) 米増直美，大井靖子，坪内美奈，他：単独家庭訪問実習における指導内容の検討，日本地域看護学会第7回学術集会講演集；118，2004.
 - 12) 前掲2) 3-19.
 - 13) 前掲6).
 - 14) 前掲6).
 - 15) 前掲7).
 - 16) 前掲8).
 - 17) 前掲7).
 - 18) 前掲8).

（受稿日 平成21年7月2日）

（採用日 平成21年9月25日）